

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第30回 たかがマスク、されどマスク

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

3月8日付『産経新聞』（東京発行、13～14版、9面＝経済面\*）の片隅に、<sup>かたすみ</sup>「13日以降のマスク着用 JR東・郵便局『個人判断』」という見出しの小さな記事が載っていました。新型コロナウイルス感染症拡大のために、国民のほとんどが着けている不織布マスクについて、政府が13日から規制緩和するのに合わせ、各公共機関や企業でも対応の変更をしようとしています。JR東日本がその日に合わせ、そうした取り組みをすることを7日の社長記者会見で述べ、日本郵政も同日、同じような発表をしたわけです。このコラムが全国日本語学校連合会のホームページにアップされる頃には、すでに実施に移されているでしょう。

JR東日本の記者会見の内容は、「乗客に求めている列車内や駅構内におけるマスク着用について、13日以降は個人の判断にゆだねる」というものです。放送や掲示で行っているマスク着用

<sup>しょうらい</sup>奨励をやめるそうです。政府は通勤ラッシュ時の混雑した列車内でのマスク着用は引き続き奨励しているので、見方によっては、JRの対応は一步進んでいるのかもしれませんが。

振り返ってみれば、新型コロナウイルスが我が国に上陸したのが今から3年前の令和2

(2020)年初頭でした。それ以来、私たちはマスクをする生活を<sup>よぎ</sup>余儀なくされていました。当初

は、時の<sup>あべしんぞう</sup>安倍晋三政権が全国民に配布した「アベノマスク」が話題になりましたが、「ガーゼでつくったマスクではほとんど役に立たない」との学説が知れ渡り、多くが活用されず、しまわれるということもありました。

効果が高い<sup>ふしよくふ</sup>不織布マスクは当時、大半が中国製だったので<sup>きゅうきよ</sup>急遽、国内のメーカーでも作るようになり、今ではほとんどが日本製で<sup>まかな</sup>賄われるようになりました。これは、<sup>ぼうえき</sup>防疫体制の確立という面では素晴らしい成果でした。また、それまでなんでも安易に海外製品に頼っていたことから、政府や国内企業経営者がリスク管理を考え、国内経済の見直しを行うことにつながったのではないのでしょうか。<sup>よだん</sup>余談になりますが、「<sup>ぶかん</sup>武漢で発生し、全世界に拡散した新型コロナウイルスは、中国がマスクを大量に売るための<sup>いんぼう</sup>陰謀だった」とまで言う人もいましたが、こちらの真偽は定かではありません。

この期間に行われたサッカーのワールドカップ中継を見ると、欧米の観客たちはほとんどマスクを着けていません。競技場だけでなく、パリやロンドン、ニューヨークといった大都会の街角でも、人々はもう、1年以上前からほとんどマスクを着けず、肩を組み合い、ビールを楽しみ、競技の応援に大声を張り上げている様子がテレビから流れてきました。中国では、これを見た国民が中国共産党・政府のゼロコロナ政策に不信を持ち、政策が撤回されたということもありました。

わが国では、ゼロコロナ政策こそとっていませんでしたが、国民の99%ではないかと思われるほど多くの人が普通にマスクを着けたままでした。今年3月上旬に行われた高校の卒業式では、政府の指導で、多くの学校が一般社会に先駆けて卒業生のマスク着用義務を解除しましたが、テレビの画面に出てきた卒業生インタビューでは、「3年間の在学中、卒業式で初めて同級生の素顔を見た」「顔を見られて恥ずかしかった」という声が多く聞かれました。

マスクのことを「顔パンツ」とまで言い、「もはやマスクは人前で外す習慣はなくなった」と断言するメディアも現れました。

それにしても、この3年間、日本人のマスクに対する対応は見事でした。令和3(2021)年の東京オリンピック・パラリンピックは無観客で行われ、それに引き続く各種スポーツ競技では、無観客が解除されても、人数制限やマスク着用、声出し応援の自粛はほぼ完璧に守られました。

コロナ禍が広まってから zoom などで行っていた各種の会議を対面で行うようになってもマスクは必須で、座席間隔は大きくあけ、アクリルボードで仕切りを付け、会議後の飲食を伴う懇親会は自粛してきましたが、マスク着用について不満を述べる人とほとんど会ったことがありませんでした。

昨年の夏には、政府や医療機関が「熱中症予防のために外であまり話さないときにはマスクを外すように」と推奨していましたが、皇居を周回しているマラソンランナーたちのほとんどはマスクを着けたままだったような気がします。

もっとも、筆者の親しい友人で、この3年間「コロナはただの風邪だ」として、社員にマスクを着けることを禁止し、店舗に来るお客さんや事務所に来る取引先の人たちに「マスクを取って大きな声で話す」ことを奨励していた社長さんがいました。この人は、自分が新型コロナに感染したときも、「風邪ひいちゃった」と言って意に介していませんでしたが、こういう人は国民の1%いるかないかでしょう。

それにしても、『産経新聞』によると、3月7日午後7時15分現在で、累計7万2952人の方がこの国で新型コロナのために亡くなりました。大変な感染症であることは間違いありません。

とはいえ、この3年間で私たちは、マスクを有効利用し、他国に比べると国民に占める感染者数、死亡者数の比率は決して多い方ではありませんでした。これまでの感染症対策はそれなりに

うまくいっているのではないのでしょうか。

ところで今、政府は「マスク規制を緩和する」というような表現を使っていますが、この規制はいつだれが作ったのでしょうか。法律でも政令、地方公共団体の条例でもないのでしょうか。政府や行政機関がマスク着用を奨励し、公共の場所などではそれを義務化するというとはありましたが、どんな規則に基づいて行っていたかがよくわかりません。政府の閣議や諮問会議で「マスクをした方がいい」という意見を公表したのは事実ですが、法律などの改正が行われたということは聞いた覚えがありません。ということは、強制力が伴っていません。

それを今、必死になって「解除」を叫んでいます。外国では普通に国民が自主的にマスクを外したのに…。

日本人はもともと、マスクをすることに何の違和感も持っていませんでした。新型コロナが蔓延する以前、日本を訪れた外国人観光客が、街中でマスクをして歩いている人を見て「日本では何か悪い疫病が流行っているのか」と不思議だったという話を聞いたことがありました。そういう社会ですから、今回、政府がいかに「マスク解除」を叫んだところで、国民は慎重になるでしょう。新型コロナについては、3年間の経験で感染を予防する方法を習得した人が多いと思います。その具体的な方法の1つがマスク着用でしょう。また、3月というこの時期は、花粉の飛散量が多く、花粉症対策でマスクをしている人も多い期間です。こうした状況から、13日を過ぎたからと言って、日本社会からマスクがすぐになくなることはないでしょう。

現実の問題として、デパートやコンビニエンスストア、飲食店などでは、引き続き店員のマスク着用を義務付けたり奨励したりする企業が殆どです。お客さんには義務付けていませんが、こうした人がたくさんいるところに行く時は、マスクをしないで行く勇気がある人はおそらく少ないものと思います。

今後どういう形でマスクをしない人が増えていくのか。それともだいぶ時間がかかるのか。マスク着用率が下がった場合、このところ減っている新型コロナ感染者数がまた増加するのか。その時、一般国民はどう対応するのでしょうか。注意深く観察していきたいと思います。

\* =冒頭に書いた「3月8日付『産経新聞』（東京発行、13～14版、9面＝経済面）」について説明します。産経新聞社では、『産経新聞』の編集を東京、大阪両本社で別々に行っており、東西で紙面が若干異なります。そのために、「東京発行」という指摘をして区別しました。また、東京発行の新聞は、毎日、10版、12版、13版、14版と時間をずらして複数の版を作成しています。読者に届けるのに時間がかかる所に届ける新聞は早く制作し、印刷所から近いところに行く新聞はぎりぎりまで編集を続けて新しい記事を少しでも多く入れるためです。新聞の各面欄外にはこの版名が印刷してありますが、筆者の手元に有った8日付の新聞は、最終の「14版」でした。とこ

ろが、経済面である9面には「13版」と書いてありました。これは、この面に入れる記事が、13版の締め切り時間以降新しいものがなく、この面は13版と14版が全く同じだということを表しています。全国紙では、ほとんどの新聞社が同じような運用をしています。そのため、このコラムでは「13～14版」と表記した次第です。